■伊勢物語　芥川

▼五八頁▲

発問　「昔、男ありけり」（五八・1）から助動詞を抜き出し、意味を答えよ。 知

答　「けり」過去。

脚問　「女のえ得まじかりける」（五八・1）とは、どういうことか。 思

答　結婚できそうになかった女。

発問　「女のえ得まじかりけるを」（五八・1）とあるが、結婚できそうになかったのはなぜか。その理由を考えよ。 思

答　女が高貴な人で、男とは身分が違ったため。（別解…将来入内させることも考えて大切に育てられていたため。）

補充　「女のえ得まじかりけるを」（五八・1）を単語に区切るとどうなるか。最も適当なものを、次から選べ。 知

ア　女／の／え／得まじ／かり／ける／を

イ　女／の／え／得／まじかり／ける／を

ウ　女／の／え／得まじ／かりける／を

エ　女／の／え／得／まじ／かり／ける／を

オ　女／の／え得／まじかり／ける／を

答　イ

発問　男は、女をどのようにして盗み出したと思うか、またその時の男の気持ちはどうであったと思うか、想像してみよう。 思

答　あらかじめ女と打ち合わせをして（従者の手引きによって）二人で逃げた。男は長年の思いが叶う喜びと、女を守り一刻も早く逃げなければという責任感・緊張感で興奮していた。

発問　「来けり」（五八・3）と「行きけり」（五八・4）との違いを説明せよ。 知

答　「来けり」は「芥川」に視点を据えて見ていると、こちらへ向かってやってきたという表現、「行きけり」は男の視点から逃げていく方向を見て、そちらに向かって進んでいくという表現である。

発問　「率」（五八・4）を文法的に説明せよ。 知

答　ワ行上一段活用動詞「率る」の連用形。

発問　「置きたりける露」（五八・5）の「たり」の文法的意味を答えよ。 知

答　存続。

発問　「かれは何ぞ。」（五八・5）を現代語訳せよ。 思

答　あれは何ですか。

脚問　この発言（五八・5）から「女」はどのような人物だと思われるか。 思

答　深窓に暮らす高貴な身分の姫君。

発問　「かれは何ぞ。」（五八・5）とあるが、このときの女の気持ちを考えよ。 思

答　キラリと光るものが美しく感じられ、興味を持った。／キラリと光るものが不気味に思えて怖かった。

発問　男は「かれは何ぞ。」（五八・5）という女の問いに対してどうしたか。 思

答　何も答えなかった。

発問　男は「かれは何ぞ。」（五八・5）という女の問いに対して何も答えなかったが、それはなぜか。 思

答　一刻も早く遠くへ逃げたかったので、心に余裕がなかったから。

補充　「かれは何ぞ」（五八・5）は女の発言であるが、この発言からどのようなことがわかるか。最も適当なものを、次から選べ。 思

ア　女が見知らぬ男に興味を持ち、素性を確かめようとしていること。

イ　待ち受けている危険を女が察知し、男に注意を促そうとしていること。
ウ　女が男の注意をそらし、その隙に男から逃げ出そうとしていること。
エ　夕暮れ時なので視界が悪く、女が露を真珠と見間違えていること。
オ　女の身分が高く、大切に育てられたため、外の世界を知らないこと。

答　オ

発問　「夜も更けにければ」（五八・7）から助動詞をすべて抜き出し、文法的に説明せよ。知

答　に―完了「ぬ」連用形／けり―過去「けり」已然形。

発問　「夜も更けにければ」（五八・7）は文脈上どこに続くか。かかっていく文節を抜き出せ。思

答　押し入れて。

補充　「鬼ある所」（五八・7）とは具体的にはどこか。本文中から六字で抜き出せ。思

答　あばらなる蔵

発問　何に加えて「神さへ」（五八・8）と言っているのか。思

答　夜が更けてしまったこと。

補充　「神さへいといみじう鳴り」（五八・8）を現代語訳せよ。思

答　雷までもたいそうひどく鳴り、

発問　「降りければ」（五八・9）「女をば」（五九・1）の「ば」の違いを文法的に説明せよ。知

答　前者は接続助詞、後者は係助詞「は」が濁音化したもの。

▼五九頁▲

補充　「男、弓・胡籙を負ひて戸口に居り」（五九・1）とあるが、その理由として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　夜が明けたかどうか確認するため。
イ　追っ手や夜盗の襲来に備えるため。
ウ　女が蔵から逃亡することを防ぐため。
エ　どこかに隠れている鬼を退治するため。
オ　翌日に向けて武器の手入れをするため。

答　イ

脚問　「男」が武装して戸口にいたのはなぜか。思

答　女を連れ戻しにくる追っ手から女を守るため。／財物を狙う賊などから女を守るため。

発問　「はや夜も明けなむ」（五九・2）を現代語訳せよ。思

答　早く夜が明けてほしい。

補充　「明けなむ」（五九・2）の文法的説明として最も適当なものを、次から選べ。知

ア　「明け」はカ行下二段活用の動詞「明く」の未然形、「なむ」は他への願望を表す終助詞である。
イ　「明け」はカ行下二段活用の動詞「明く」の連用形、「なむ」は他への願望を表す終助詞である。
ウ　「明け」はカ行下二段活用の動詞「明く」の未然形、「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の終止形である。
エ　「明け」はカ行四段活用の動詞「明く」の已然形、「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の終止形である。
オ　「明け」はカ行四段活用の動詞「明く」の已然形、「なむ」は他への願望を表す終助詞である。

答　ア

補充　「鬼はや一口に食ひてけり」（五九・3）とあるが、この「鬼」は実際は何だったのか。本文中から十五字以内で抜き出せ。思

答　堀河の大臣、太郎国経の大納言（14字）

発問　「食ひてけり」（五九・4）の「て」を文法的に説明せよ。知

答　完了の助動詞「つ」の連用形。

補充　「あなや」（五九・4）の説明として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　女に襲いかかろうとした鬼の恐ろしい声。
イ　女が鬼に襲われる瞬間を目撃した男の絶叫。
ウ　鬼に襲われて息絶える間際に女が発した悲鳴。
エ　鬼を退散させようとして男がかけた呪文。
オ　突然現れた鬼に対して命乞いをする女の懇願。

答　ウ

発問　「え聞かざりけり」（五九・5）を主語、目的語を補って現代語訳せよ。思

答　男は女の悲鳴を聞くことができなかった。

発問　「足ずりをして」（五九・7）とあるが、ここから男のどのような心情が読み取れるか。思

答　女を失った悲しみ。／鬼の棲む蔵に女を入れてしまったことへの後悔。／不本意な現実をどうすることもできないもどかしさ。

補充　「足ずりをして」（五九・7）から読み取れる男の心情として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　追悼　イ　歓喜　ウ　後悔
エ　感謝　オ　軽蔑

答　ウ

発問　「消えなましものを」（五九・10）を品詞分解し、それぞれを文法的に説明せよ。知

答　消え―ヤ下二・用／な―強・未／まし―不可希・体／ものを―接助（詠嘆）

発問　「消えなましものを」（五九・10）とあるがなぜ「消えてしまえばよかった」と思うのか。思

答　女がいなくなった今となっては生きていても仕方がないと思ったから。／女の問いかけがあった時に消えてしまっていたら、このようなつらい目に合わなかったから。

発問　「白玉か…」（五九・9）の和歌に用いられている修辞は何か。知

答　縁語

補充　「これは…」（五九・11）以降の段落では、「女が鬼に食われた」というそれ以前の話の種明かしをしている。その内容として最も適当なものを、次から選べ。思

ア　女はいとこの女御のもとに出仕する道の途中で、男に連れ去られてしまった。しかし、そのあまりの美貌で通りかかった女の兄弟が気づき、男を捕らえて事なきを得た。
イ　女はいとこの女御と一緒に暮らしていたが、顔立ちがそっくりだったので男が女御と間違えて盗み出してしまった。恐怖で女が泣き出したので、女の兄弟が聞きつけて保護した。
ウ　女はいとこの女御と同室に暮らしていたので、女御と男を引き合わせ、駆け落ちの手引きをした。しかし、女御の兄弟と遭遇したために逃避行は失敗し、女も共犯として罰せられた。
エ　女はいとこの女御の部屋に居候していたが、男と相思相愛になりこっそり駆け落ちした。しかし道中で男が罪の意識から泣き出したので、女の兄弟に見つかってしまい、計画は失敗した。
オ　女はいとこの女御のもとにお仕えしていたが、容貌が大変美しかったので男が懸想して宮中から盗み出した。しかし、逃げる途中で女の兄弟に見つかり、女は連れ戻された。

答　オ

発問　「かたちのいとめでたくおはしければ」（五九・13）を現代語訳せよ。思

答　容貌がとても美しくていらっしゃったので。

補充　「兄人」（五九・15）の読みを現代仮名遣いで答えよ。知

答　しょうと。

発問　「取り返したまうてけり」（六〇・2）を品詞分解し、それぞれを文法的に説明せよ。知

答　取り返し―サ四・用／たまう―ハ四・用・ウ・尊・補／て―完・用／けり―過・終

補充　「后のただにおはしけるとき」（六〇・3）とはどのようなときか。具体的に説明せよ。思

答　二条の后がまだ入内する前の臣下の身分でいらっしゃったとき。

脚問　絵巻の中で、本文の描写と異なる描かれ方をしている場面はどこか。思

答　絵巻左の、鬼に食われる女を見て男が足ずりをしている場面。

▼思考力問題▲

補充　以下（授業の一節）を読み、分析として最も適当なものを、後から選べ。思

教師―『伊勢物語』は今に至るまで長く読み継がれている古典中の古典です。特に「芥川」の話はよく知られ、ここからさまざまな文学や芸術が派生していきました。絵画作品では、男が女を負ぶって川沿いを逃げる絵柄が、江戸時代前期以降定着していきます。

また、「芥川」の文章とこの絵柄を念頭に置いた江戸時代の川柳に「あくた川どっちも逃げる形（なり）でなし」というものがあります。この句のおもしろみはどこにあるのか、話し合ってみましょう。

ア　生徒A―宮中から慌てて逃げたので、どっちに向かったらいいのかわからず困っている様子を、第三者の視点からユーモアを込めて詠んだんだと思うよ。あたりをきょろきょろ見回しているみたいだもん。

イ　生徒B―逃避行にしては衣装が豪華すぎるということを茶化しているんじゃないかな。十二単はすごく重いって聞いたことがあるし。男も裾を引き上げているようだけど、女を背負って逃げるのには不向きな服装だよね。

ウ　生徒C―「どっちも」ということは、男も女もということか。追われているにしては両者とも表情に余裕がありすぎることへの違和感を表した句なんじゃない？　今のマンガならもっと厳しい表情でリアルに描くはずだよ。

エ　生徒D―男が女をずっと背負って逃げたとは考えにくいよね。もしかしたら手を引いて二人で走ったかもしれないし、途中で馬に乗ったかもしれない。「背負ったとは限らない」という論理的なほころびを、鋭く突いた句だと思うな。

オ　生徒E―そもそもこの時代、身分の高い男女が二人きりで逃げるなんてことは現実的じゃなかったはず。この話はあくまでフィクションだということをおもしろおかしく大衆に示そうとした、啓蒙的な川柳だと考えられるね。

答　イ

▼てびきの解説▲

学習

1　第一段落について、物語の展開に即して「男」の行動と心情を整理してみよう。思

答　（男の行動）「え得まじかりける」女に何年も求婚し続ける。…（男の心情）女への強い愛情。情熱的である。

(男の行動) 女を盗み出して逃走。…(男の心情) 長年の思いが叶う喜びと、女を守り一刻も早く逃げなければという責任感・緊張感で興奮している。
(男の行動) 芥川のほとりを逃げていく。…(男の心情) 追っ手に捕まりたくない一心で先を急ぐことだけを考えており、女の質問に答える余裕がない。
(男の行動) 荒れた蔵に女を入れ、戸口で夜明けを待つ。…(男の心情) 雷鳴・降りしきる雨・夜の闇、と不安をあおられる状況の中、ただただ早く夜が明けてほしいと待ち望んでいる。
(男の行動) 夜が明け、女がいないことに気づき、泣いて和歌を詠む。…(男の心情) 愕然とし、悲しみ嘆き、悔しがる。

2 「白玉か……」の歌について、助動詞・助詞に注意して現代語訳してみよう。また、歌に込められた「男」の心情を説明してみよう。 思

答 〈現代語訳〉「(あれは) 真珠かしら、何かしら。」とあの人が尋ねたとき、「露だよ。」と答えて、(露と同じように私も) 消えてしまえばよかったのに。(そうしたらこんな悲しみもなかったであろうに。)
〈心情〉やっとのことで盗み出した女と幸せに過ごす間もなく女を失ってしまった悲しみ、女の問いに答えなかった(言葉を交わし互いを確かめ合うこともなかった)自分に対する後悔、自責の念が身を苛み、このまま生きていても意味がないと嘆いている。

3 第二段落で語られている事の顛末を説明してみよう。 思

答 男は、「いとこの女御」のもとにいた藤原高子(後の二条の后)を盗み出したが、高子の兄たちが取り返した。

言語活動

1 第二段落は後人の付け加えた注記だと言われている。以下の観点から、第二段落について話し合ってみよう。 知思主

(1) 第二段落は第一段落に対してどのような関係にあるか。

解答例
・第一段落の不可思議な出来事の種明かしをしている。
・第一段落の物語は実在する人物の事件であったと暴露している。
・第一段落の事件の裏に隠された事情を説明している。 等

(2) 第二段落があることで章段全体の読みはどう変わるか。

解答例
・単なる絵空事の物語ではなく、現実的な話として納得する。
・実在の人物の登場により、歴史上の話として関心が深まる。
・「業平」のスキャンダラスな物語として興味がそそられる。
・「業平」という人物のイメージが浮かび上がってくる。 等

ことばと表現

1 傍線部の助詞について、種類と働きを説明してみよう。 知

(1) 女のえ得まじかりけるを、

答 格助詞、同格

(2) 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。

答 係助詞、強意

(3) 鬼ある所とも知らで、

答 接続助詞、打消接続

(4) 神さへいといみじう鳴り、

答 副助詞、添加

(5) はや夜も明けなむと思ひつつ

答 終助詞、他への願望